

社会的ルールの適用に関する探索的研究

畠山 寛

Hiroshi HATAKEYAMA : Research on an Application of the Social Rules

本研究の目的は、社会的行動の適切さの評価と評価の際の理由を明らかにすることにより、社会的ルールの適用について探索的に明らかにすることである。私立短期大学生248名を被調査者とし、エピソード内の親友、友人の行動の適切さを評定させ、その理由について述べさせた。その結果、エピソードから得られる状況の解釈の違いによって適切さの評価に違いがあることが明らかにされた。これにより、状況の解釈が異なれば社会的行動に適用される社会的ルールにも違いがみられることが明らかにされた。

キーワード：社会的ルールの適用 状況の解釈 社会的行動の適切さの評価

1. 問題

私たちの日常の社会的行動には、「相手のプライバシーを尊重すべきである」や「冗談を言ったり、からかったりしない」など、それを統制するための非公式的な暗黙の社会的ルールや適切さの基準が存在する（以下、全てルールとする）¹⁾²⁾³⁾。さらに、このようなルールは、状況やかかわる相手が異なることにより変化することも明らかにされている³⁾。これらのことから、社会的行動はルールによって統制されているものの、つねに一定のルールによって統制されているわけではなく、異なるルールによって統制されているといえる。

このようなルールの存在は私たちの日常生活では、特に人との関わりにおいてとても重要な役割もっている³⁾。このようなルールに従って行動することにより、対人葛藤を回避、あるいは、減少させたり、かかわる相手との親密さの程度を調節し適切な心理的距離を保たせる役割を持っている。つまり、これらのルールに従うことで、円滑な対人関係

を営むことができると考えられる。

ところで、ルールに関する知識は過去の経験や欲求などととも、私たちの社会的行動のためのデータベースに保持されている⁴⁾。そして、状況や相手に応じて、このデータベースに保持されている知識を利用することにより適切に社会的行動を統制していると考えられる。これは、私たちの社会的行動がルールによって統制されているものの、実際にどのようなルールに従うのかについては、個人が保持しているデータベースの内容に委ねられているとともに、どのようなルールを適用するのかについても個人の選択に依存するものであると考えられる。

それでは、私たちは社会的行動を統制するときに利用するデータベース内のルールは、どのような理由によって適用されているのだろうか。Collettは「社会的行動を統制する『統制ルール』は個人に何をなすべきであるのかを明らかにする働きを持ち、命令形で表現できることが多く、“IF P, then Q.”と表現することができる」と述べている⁵⁾。このことは、個人がルールを適用する以前に「Pであるならば」といった前提を持つことが必要になることを

示している。つまり、私たちが社会的行動のあるルールによって統制しているとき、そこには“IF P.”の存在があると考えられる。この“IF P.”の内容を明らかにし、そのうえでどうすべきであると考えられるかを明らかにすることにより、データベース内のルールの適用の仕方について明らかにできると考えられる。この観点から言えば、これまで明らかにされてきたルールというのは、特に、かかわる相手がどのような相手であるのかを問題にしてきたと考えられる。つまり、相手が友人であればどうすべきか、あるいは、恋人であればどうすべきかといったことについて明らかにされてきたのである。

しかし、私たちの日常生活においては、かかわる相手が誰であるのかといった情報のみによって、行動を統制しているわけではない。むしろ、そのような対人情報に加えて他の条件も存在するはずだと考えられる。例えば、友人に対して、信頼関係を壊さないためにも「嘘をつくべきではない」というルールがあったとしても、あえて嘘をつくことが友人を助けることにつながったり、信頼関係を維持するために必要だという状況であれば、「嘘をつくべきではない」というルールはその状況においては適用されないことになる。つまり、どのような状況であると判断するのか、その解釈や理解が前提となる。

社会的状況とルールとの関連についてDianceは同性・異性の友人関係を用いて明らかにしている⁶⁾。この研究では具体的な社会的状況を示したエピソードを用い、そのエピソード内の行動がどの程度適切であるのかについて、行動の程度を操作することによって被調査者に判断させ、なぜ適切であるのかについての理由を挙げさせた。Dianceはこの理由の中で述べられるルールの存在(規範的な言葉)に注目した。しかし、Colletの「統制ルール」の考え方に基けばエピソード内から得られる被調査者の状況の解釈や理解の違いなども明らかに出来ると考えている。そこで、本研究では、社会的行動の適切さの評価とその理由を明らかにすることにより、社会的ルールの適用について探索的に明らかにすること

を目的とする。

このようなルールの適用について考えることは、例えば、ルールを知っていてもそれをいつ適用させるのかといったことがわからないままに不適切な行動を取ってしまったたり、あるいは、不適応行動を生起させる誤った状況の解釈にはどのようなものがあるのかなどについて知るための知見を得られると考えられる。

本研究では友人関係に関わる状況について取り挙げることとする。それは、被調査者となる短期大学生が最も慣れ親しんでいる関係であると考えられるためである。その際、友人関係のルールは親密さの程度によっても異なることから⁷⁾、友人の親密さについても考慮することとする。

2. 方 法

(1) 被調査者

鳥取県内の私立短期大学生 248名(エピソード1:139名, エピソード2:109名)

(2) 手続き

1) 調査用紙 調査用紙には親友(友人)の行動が記述されている社会的状況を載せた。調査用紙一部につき1エピソードである。さらに、適切さを評価する質問と、その理由について尋ねる項目も載せた。

2) エピソード エピソードはDiance⁶⁾で使われているものを参考にし、2つのエピソードを用意した。

エピソード1:約束のキャンセル

あなたは週末に親友(友人)と一緒に映画に行く予定でした。金曜になって、親友(友人)は恋人とのデートが入ってしまったので、映画に行くことをキャンセルしたいと言ってきました。

エピソード2:親の病気

ある日、親友(友人)があなたに電話をかけ

てきました。親友（友人）は自分の部屋であな
たと話をしたいといってきました。

あなたが親友（友人）の部屋を訪ねると、親
友（友人）は泣いていました。話を聞くと親友
（友人）の親が深刻な病気にかかっているとの
ことでした。親友（友人）は親の状態をととも
恐れていました。

あなたは約1時間ほど親友（友人）と話をし
て帰ってきました。

- 3) 適切さの評価 親友（友人）の行動について
「非常に不適切である：1」から「非常に適切
である：7」までの4を中点とした7件法で回
答を求めた。
- 4) 友人の親密さの操作 親密さの操作は親友を
最も仲の良い友人、友人は最も仲が良い友人以
外の友人とすることを口頭で説明した。

3. 結 果

(1) 親友、友人の行動の適切さの評価について

エピソード1、2のそれぞれにおける親友、友人
の行動の適切さの評価をTable 1に示す。親密さの

効果をそれぞれのエピソードにおいて検討するた
めに分散分析を行ったものの、親密さの効果は認めら
れなかった ($p > .10$)。

エピソード1においては、親友、友人の行動の適
切さの評価は中点よりもやや不適切の極よりである
が、被験者の全体の評価では適切でも不適切でもな
いことを示している。次に、エピソード2では、親
友、友人に対する適切さの全体的評価はやや適切さ
よりであった。つまり、このエピソードにおけるこ
の行動は不適切な行動ではないと考えていることを
示している。

(2) 適切さの評価の理由について

エピソード1、及び、エピソード2において得ら
れた適切さの評価の理由をTable 2に示す。

Table 1 エピソード別の親友・友人の行動の適切
さ評価

	親友	友人	効果
エピソード1	3.91	3.54	—
N	67	72	
エピソード2	4.98	4.59	—
N	51	58	

Table 2 適切さ評価の理由とその割合、及び、理由別の適切さ評定

適 切 さ 評 価 の 理 由		%	平均評定
エピソード1	先約が優先されるべきだ	23.2	2.43
	恋人は大切だ	23.2	5.28
	先約が優先だが、恋人が大切であることもわかる	15.9	3.18
	直前のキャンセルは良くない	9.4	2.92
	あまり会えない恋人であれば優先される	5.1	4.00
	友人の気持ちを尊重する	4.3	5.00
	直前にキャンセルしてくれた	3.6	3.80
	どうでもよい	7.2	4.40
	その他	8.0	
エピソード2	悩みや不安があれば、話をするのは当たり前	42.2	5.52
	悩みや不安があるのは理解できるが、相手の方から訪ねてくるべきだ	16.5	3.50
	自分に相談してくれることはうれしい	7.3	5.37
	親の病気について話すべきでない	4.9	4.00
	知識のある人・医者と相談すべき	5.5	3.00
	よくわからない	11.8	4.15
	その他	11.8	

エピソード1で得られた理由を整理すると、大きく9つに分類することができた。その中でも、「先約が優先されるべきだ」と「恋人は大切だ」という理由はともに被調査者の23.2%が述べている。次に、これらの両方を考慮するものが約16%みられた。

エピソード2で得られた理由を整理すると大きく7つに分類することができた。その中でも、「悩みや不安があれば、話をするのは当たり前だ」という理由が最も多く約4割の被調査者が挙げている。次いで、「悩みや不安があるのは理解できるが、相手の方から訪ねてくるべきだ」が16.5%となっている。

さらに、エピソード1, 2において整理された理由別に適切さの評価を算出すると (Table 2), エピソード1では「先約が優先」、「先約が優先だが、恋人が大切なこともわかる」、そして、「直前のキャンセルは良くない」などでは、親友や友人の行動を不適切と判断していること、また、「恋人が大切だ」とする人は適切であると判断していることが明らかにされた。

エピソード2では、「悩みや不安があれば話すことは当たり前」、「自分に相談してくれることはうれしい」では親友、友人の行動を適切なものと判断している一方で、「相手の方から訪ねるべきだ」や「知識のある人に相談すべき」と考える人は、親友、友人の行動を不適切であると判断していることが明らかになった。

4. 考 察

本研究の目的は、社会的行動の適切さの評価とその理由を明らかにすることにより、社会的ルールの適用について探索的に明らかにすることであった。

まず、エピソード1から考えてみると、その内容は「映画をみる約束をしていたにもかかわらず、相手が恋人とデートするために、その約束をキャンセルしてしまう」というものである。このエピソードを評価する際の理由は大きく9つに分類された。こ

のことはこのエピソード状況から得ることができる解釈が複数あることを示すものである。例えば、「先約が優先されるべきだ」という理由についてどのような状況解釈をしているのかについてColletの考え方、つまり、「IF P」の形に直して考えると「複数の約束をした場合」となり、その上で、「最初の約束が優先されるべきである」というルールを適用していると考えられる。同様に他の理由もみていくと、「恋人は大切だ」という理由では、「自分との関係（友人関係）と恋人関係を比較するならば」となり、「恋人の方を大切にすべきだ」となる。このことから、このエピソード状況の解釈においては「先約が優先されるべきだ」では「複数の約束」状況であると解釈しているし、「恋人は大切だ」では対人関係を比較する」状況であると解釈していると考えられる。そして、エピソード1で3番目に多かった理由では、この「複数の約束」状況と「対人関係を比較する」状況の両方について解釈していると考えられる。この他の理由についても同じように、「直前のキャンセルは良くない」は、「約束を破棄するならば、もっと早い時期にすべき」であることを示しているし、「あまり会えない恋人であれば、恋人を優先する」ことを示している。

このように状況解釈とその状況で適用されるルールを考慮したうえで、親友や友人の行動の適切さの評価を考えてみる。すると、「先約が優先されるべき」では相手が約束を破棄しようとしているので不適切な行動となり、「恋人は大切だ」では相手が恋人とデートに行きたいと欲していることにより適切であると考えているということになる。つまり、ルール適用が異なることで適切さの評価も変わることを示している。

次に、エピソード2についてみる。エピソードの内容は「親が深刻な病気になった恐れを抱いた親友（友人）が、自分を呼び出して話をする」というものである。このエピソードでは「悩みや不安があれば、話をするのが当たり前」という理由が約4割ほどおり、親友・友人が悩みを持つならば打ち明

けるべきだといった友人関係のルール⁷⁾を反映していると考えられる。しかし、このような状況でも、「呼び出し」状況と解釈するものもあれば、「相談されてうれしい」など「信頼・信用」状況と解釈する者もある。また、「親のことは話すべきではない」や「知識のある人・医者と相談すべき」と考える人もいる。これらの理由の違いがルール適用の違いをもたらすためにエピソード1と同様に適切さの評価にも違いをもたらしている。つまり、状況の解釈の違いによって、ルール適用の違いがあると言える。

それでは次に、本研究の2つのエピソードを通してみる。それぞれのエピソードによって得られる理由が複数認められた。しかし、エピソード1と2では、理由のパーセンテージの分布が異なっている。エピソード1では高い順から23.2%、23.2%、15.9%と続く。一方で、エピソード2では高い順から42.2%、16.5%と続いている。このパーセンテージは、状況解釈の合意の程度について示す指標であると考えられる。つまり、エピソード2では約4割の被調査者はこのエピソードの状況を「親友(友人)が悩みを持った」状況と認識しており、彼らは「悩みを聞くべきだ」というルールに従って、親友(友人)の行動を評価していると考えられる。つまり、悩みを聞くことは適切な行動だが、この状況で悩みを聞かない行動は不適切だと判断される。しかし、一方で、エピソード1のように合意のパーセンテージが少ない場合、ある状況の解釈は、もう一方の解釈にはとても不適切な行動として映るといえる。つまり、「先約は優先すべき」と考える人にとっては「恋人は大切」と考えて行動する人に対して悪い評価をしてしまう。もちろん、この逆もありうることである。そして、この合意のパーセンテージが多い程、他の人の行動も同様の行動となりやすいと考えられる。このようなことから、今後は、状況解釈の合意の程度の高さなどを考慮する必要もあると考えられる。

最後に、エピソード1と2において共通すると考えられるような理由はみられなかった。つまり、ルール適用に関する普遍的な基準が見られなかったことになる。この点についても今後複数の社会的状況に共通する次元を取り上げるなどして検討する必要もあると考えられる。さらに、先行研究で明らかにされている親密さによるルールの違いについては本研究では認められなかった。これについては、今回使用したエピソードが、単純に対人関係のみを考慮するものではないことを含んでいる結果であると考えられる。

引用文献

- 1) Price, R.H., & Bofford, D.L. "Behavioral appropriateness and situational constraint as dimensions of social behavior". *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, (1974), p. 579-586.
- 2) Argyle, M., Graham, J.A., Campbell, A., & White, P. "The rules of different Situations". *New Zealand Psychologist*, 8, (1979), p. 13-22.
- 3) Argyle, M., Henderson, M., & Furnham, A. "The rule of social relationships". *British Journal of Social Psychology*, 24, (1985), p. 125-139.
- 4) 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巖「社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱」, 『宮崎大学教育学部紀要(教育科学)』, 74, (1993), 1-16.
- 5) Collet, P. (Ed) *Social rules and social behavior* (oxford: BasilBlackwell). (1977).
- 6) Diane, H. F. "Social norms in same- and cross-gender friendships". *Social psychology quarterly*, 62, (1999). p. 53-67.
- 7) 畠山 寛「青年期の友人関係のルールに関する研究」, 『鳥取短期大学紀要』, 48, (2003), 49-57.